

日本近代文学における「ゴリキー」の影響に関する研究——明治・大正期の文学を対象に

ブルナ・ルカーシュ

## 一、研究の出発点

現在、文学研究に携わる人でなければ、マクシム・ゴリキー (Максим Горький、一八六八～一九三六) の作品はおろか、その人名すら知るものが少ない。文学研究者の間でさえもゴリキーの名は一般的に知られず、他の作家と勘違いされることも珍しくない。一例を引くと、松田穰編『比較文学辞典』(東京堂、一九七八・一)のなかで大社淑子は「わが国にゴリキーが紹介されたのは、明治三〇年一月の『太陽』に二葉亭が「肖像画」を訳出したのが最初であろう。」と、ゴリキーの「肖像画」をゴリキーの作品と誤認している。

しかし、現在はこのような埋没されているとはいえ、ゴリキーはかつて世界各国の文壇を風靡し、トルストイやツルゲーネフに次ぐ、一九世紀末のロシアが生み出した新しき文豪と謳われた。日本でも、一九〇一(明治三四)年に初めて紹介されて以来、その翻訳や翻案、または紹介文や評論が数年にわたって多数発表されている。自然主義の思潮が日本文壇に浸透した日露戦争後に至りゴリキー文学は日本で流行の頂点に達した。年号が明治から大正へと切り替わった頃からその人気は次第に下火になっていったが、ゴリキー文学に熱心な関心を持つ読者が消えたわけではない。

ゴリキーの作品はこの時期に数多くの日本人作家に刺激を与えたと思われる。本論文で取り上げられる内田魯庵の「社会詩人」(『文芸界』一九〇二・五)と白柳秀湖の「畜生恋」(『直言』一九〇五・三・二六、四・二)はゴリキーの作品を下敷きにして書かれたものである。一方、三島霜川の「悪血」(『新小説』一九〇七・六)、石川啄木の「漂泊」(『紅苜蓿』一九〇七・七)や小栗風葉の「世間師」(中央公論』一九〇八・一〇)などは、凶暴な浮浪者の自由奔放な生活を描いたゴリキーの〈浮浪者もの〉の中から様々な要素を積極的に摂取し、独自に展開した作品である。また、大正期に入ってから文学活躍を開始した宮嶋資夫の『坑夫』(近代思想社、一九一六・一)や宮地嘉六の「放浪者富蔵」(『解放』一九二〇・一)などはゴリキーの作品の読書体験を自らの放浪と労働の実体験に重ねて、新しい労働文学を開拓したものとと言える。一人ひとりの作家の意識の中でゴリキー文学の読書体験が独自に咀嚼されたその結果がこれらの作品で明らかに表出されている。

ゴリキーはこれまで主にプロレタリア文学との関係において考察されており、明治・大正期の日本人作家に与えた影響については詳しく検討されてこなかった。ゴリキー没後、中野

重治は、明治の作家が「ゴリキイに対して生き生きした興味を持つ必要が自分として感じられなかった」ため、そこから「受けた影響はかなりの小さかった」（『ゴリキイと日本文学』『文学評論』一九三六・八）と述べたが、この見解はのちに昇曙夢や大社淑子などに踏襲された。また、吉田精一はその著書『自然主義の研究』（東京堂出版、一九五五・一一）の中で、ドストエフスキヤートルストイなどと比べれば「ゴルキイの自然主義に及ぼした影響ははるかに大きい」と指摘しているが、作品分析を通してその影響の内実を明らかにしていない。小栗風葉の「世間師」について指摘した岡保生（『世間師』の成立）（『国文学研究』昭三九・一〇）、石川啄木の小説について指摘した西垣勤（『近代文学の風景』積文堂、二〇〇四・五）や安元隆子（『石川啄木とロシア』（翰林書房、二〇〇六・二））、また宮嶋資夫の『坑夫』について指摘した森山重雄（『宮嶋資夫における「実行と芸術」』（『本の手帖』一九六七・六）などについても同じことを言える。

本論文は、こうした研究状況を踏まえて一九二〇年代以前の日本文学、正確に言えば、ゴリキイの作品が日本で初めて紹介される一九〇一（明治三四）年から『ゴオルキイ全集』（日本評論社出版部）の刊行が開始され、プロレタリア文学の台頭を告げる『種蒔く人』が発刊される一九二一（大正一〇）年までの時期を対象とし、具体的な作品の個別分析を通してゴリキイ文学の影響を実証し、この時期の日本文学にゴリキイが甚大な刺激を及ぼしたことを明らかにしたものである。

## 二、論文の構成

序説の第1章は研究の出発点、先行研究の現状、論文の構成と研究に当って採用した方法論について説明した。第2章ではマクシム・ゴーリキイの遍歴と明治・大正期に日本で主に注目された彼の初期作品の特質を簡略に纏めた。影響関係について考察を行なう際に、発信者―受信者―受信者という経路を念頭に置かなければならないが、本章はその内容からいって発信者（*emetteur*）の領域に該当し、本研究の必要不可欠の前提である。

第I部第1章においては、外国文学に対する作家（読者）の認識は単に作品の読書体験のみによって形成されるわけではなく、同時代の言説によっても多分に影響されるという事実を念頭に、新聞・雑誌・単行本などに発表された主要な紹介文、評論や翻訳・翻案など、送信者（*transmetteur*）の領域に該当するテキストを幅広く確認し、これらの諸テキストによって作られる言説空間を検討した。それによってゴリキイ文学は一九〇一年末から外国の評論を経由して日本で注目されたこと、日露戦争後に自然主義の思潮との関係において一躍流行したこと、また明治末期・大正初期にその流行が下降線を辿ったことを明らかにし、ゴリキイ文学の受容状況の俯瞰図を提示した。

第I部第2章から第4章まではこの時期の翻訳・翻案を対象として分析を行なった。文学影

響について考察を行なう際には、翻訳状況の確認は不可欠の条件であるが、数多いゴーストの翻訳作品を網羅し、原文と訳文を比較照合した上で翻訳の方法や内容・形式の変容について判断を行なうことはとうてい一人の研究者の手に負えない。そのため、ここでは三点の翻訳作品についてのみ論究することにした。

第一部第2章では、内田魯庵が短篇「社会詩人」の中でゴーストの「オルロフ夫婦」と「無礼者」という二つの異なる作品から摂取した要素を結合し、その上に自分の思想を投射したことを、第3章では、従来白柳秀湖の創作として位置付けられてきた短篇「畜生恋」はゴーストの短篇「二十六人と一人」の翻案であることを確認した上で、舞台の設定や登場人物の性格を変えることによって秀湖が作品の中で労働者問題を顕在化したことを明らかにした。第4章では、ゴーストの中篇「マルワ」を訳した小栗風葉の「強き恋」(『日本』一九〇七・一〇・七―一・一七)に着目し、最終場面の削除によって物語内容が著しく変わったこと、また風葉がゴースト作・二葉亭訳「ふさぎの虫」(『新小説』一九〇六・一・三)に倣って登場人物の会話に東北方言を採り入れたことを論証した。これらの作品を分析することによって、それぞれの〈翻訳者〉が原文のテキストにどのように立ち向かったのかが明らかになったのみではなく、〈翻訳者〉の他の作品との関連性や同時代の文壇の思潮に関わる様々な問題点が示された。

第二部以降は本論文の中心となる受信者 (recepteur) の問題に着目した。第二部第1章ではゴーストに感化された三島霜川が短篇「悪血」の中で法律や道徳を無視して放縦に生きる野生的な浮浪者を造形したこと、一方、「駅夫」や「坐礁」という短篇小説の中ではゴーストの「ふさぎの虫」に描かれる生の不安と懐疑が再現されていることを示した。第2章では石川啄木の小説「漂泊」に焦点を当て、作品の冒頭に展開される海の描写や後藤肇の人物像、更に後半で重要な意味を持つ「世の中から辞職する」という後藤肇の言葉など、作品全体がゴーストを意識して構想されたことを明らかにした。第3章では小栗風葉の「世間師」を検討し、作品前半は既にそれ以前の風葉の作品にみられる場面を再現しているのに対して、作品後半で描かれる銭占屋の人物像は「ふさぎの虫」の読書体験の影響下に構想されたことを実証した。

第三部第1章では二葉亭が訳したゴーストの「ふさぎの虫」(『新小説』一九〇六・一・三)に着目し、その翻訳表現を検討した上で「ふさぎの虫」と二葉亭の「人生問題の研究」との関係について考察を行なった。第2章では、「憂愁」や「哀愁」などと訳され、近代ロシア文学で重要な意味を持つ「トスカ」という表現が二葉亭の「ふさぎの虫」を通して日本で注目され、本間久雄によって日本の自然主義に関連性を持つ概念として位置付けられたこと、また、のちに文学表現に転換され、北原白秋、高橋元吉、小熊秀雄の詩作の中で様々な意味を持って活用されたことを明示した。

第四部では大正初期のアナーキストらとゴースト文学との関係について考察を行なった。

第1章では大杉栄がゴースキーの〈浮浪者もの〉を熱心に読み、その中で見出した「強烈な生活本能と、反抗本能」が彼の個人主義と反逆思想の形成に刺激を与えたことを明示した。第2章と第3章では、『近代思想』や堺利彦の売文社の人々と交流し、大杉の反逆思想とゴースキー文学への関心が伝播した宮嶋資夫と宮地嘉六の初期作品に注目し、分析を行なった。第2章では、従来ゴースキーの長篇小説『三人』と関連付けられてきた宮嶋の『坑夫』は、社会への凶暴な反逆、道徳倫理の否定、自由への野生的な渴望と自然への愛着、また人生の果敢なさを自覚しての「寂しさ」と「苛ら立たしさ」といった複数の要素はゴースキーの〈浮浪者もの〉から撰取され主人公石井金次に投射されたが、彼は一方では社会構造の歪みの自覚（垂直線の批判性）と同胞の態度への不満（水平線の批判性）から形成される階級意識を持つ労働者の側面を持ち合わせており、その点でゴースキーの浮浪者と異なることを明らかにした。

宮嶋がゴースキーの〈浮浪者もの〉の系統を引く『坑夫』をもって文壇に登場したのに対して、宮地の初期作品の中では、放浪（＝自由）への志向や社会による個人の奴隷化への反感などゴースキーとの類似点が認められるとはいえ、彼はゴースキーが描くような強烈な「意志」を持つ浮浪者を自分の作品で中心に置いて描こうとしなかった。第3章では、宮地がその初期作品において「自由」を手にしようとして、しかし、それに必要な「意志」を持ち合わせていない人間の葛藤を描いたこと、言い換えれば、彼は作品の上でゴースキーが主張した自由主義・独立主義は実社会において実現不可能なのかと疑問を投げかけたことを示した。

終章では、小林多喜二の初期戯曲「女囚徒」と短篇小説「最後のもの」に着目し、小説家としての多喜二の出発点およびその思想の形成においてゴースキーの「超人思想」がどのような役割を果たしたのかについて考察した。一九二〇年代にはゴースキーの社会主義系の長編小説『母』や『懺悔』などが集中的に注目され、プロレタリア文学作家に強い刺激を及ぼしたと従来考えられてきたが、ここでは、年号は昭和に変わっても、〈浮浪者もの〉が示唆に富んだ作品として若手作家に読み継がれたことを小林多喜二の初期作品を一例として明示した。

巻末にはゴースキーの翻訳年表と関係資料年表を付した。

### 三、研究の方法

本論文の第1部第1章ではゴースキー文学の初期受容を検討し、第2章から第4章までは具体的な翻訳・翻案を分析した。分析に際しては、翻訳・翻案の良不良を判断したわけではなく、スーザン・バスネット (Susan Bassnet) ・アンドレー・ルフェーヴル (André Lefevre) 編著『翻訳、歴史と文化』*Translation, History and Culture* (London: Cassell, 1990) やローレンツ・ヴェヌティ (Lawrence Venuti) 著『翻訳者の不可視性』*The Translator's Invisibility* (London: Routledge, 1995) を参考にしつつ、〈翻訳者〉が原点 (英訳) のテキストをどのように〈操作〉したのか、そし

てこの〈操作〉の過程を通して〈翻訳者〉がテキストにどのような思想を投入したのかについて検討・考察を行なった。

第Ⅱ部から第Ⅳ部までは、日本近代文学にみるゴーストの影響を研究対象として個別作品の分析を中心に論究を進めた。影響関係の研究は「きわめて実証的にして且つ分析的でなければならぬ。これはあくまでも事実に出発し、それに憑拠しそれを処理するところに成立するのであって、空虚なる方法論にたより、概念的な結論を与えることによっては何等成果を期し得ない。」(『比較文学』潮文社、一九七二・六)という吉田精一の指摘を踏まえ、本論文では概括的な結論を控えて個別作品の緻密なテキスト分析を通して影響関係を実証することを第一の研究目的とした。

本論文では、影響関係の分析・実証を研究目的としたため、ポール・ヴァン・ティエgem (Paul Van Tieghem) の『比較文学』(丸岡出版社、一九四三・八)やマリウス・フランソワ・ギユイヤール (Marius-François Guyard) の『比較文学』(白水社、一九五三・四)などの基礎的文献で提唱された実証的な比較文学論を参考にしつつ研究を行なった。但し、外国文学による影響が認められるとはいえず、文学作品はその影響のみによって形成されているわけではない、影響関係の解明のみに専念した比較文学論の研究者はとうてい作品全体を把握し得ないことを「比較文学の危機」*The Crisis of Comparative Literature* (Proceedings of the Second International Congress of Comparative Literature. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1959) で批判したレネー・ウェレック (René Wellek) の指摘を意識して、論究の範囲を影響関係の解明のみに限定しなかった。影響関係の実証は本論文の第一目的ではあるが、唯一の目的ではない。

作品分析を行なう際に、最初に影響関係の検証から始めた。この際には、表現上の影響(例えば、第Ⅱ部第1章では、三島霜川作品「ふさぎの虫」で使われる「ふさぎの虫」という表現は二葉亭訳「ふさぎの虫」から摂取されたことを示した)、文体上の影響(例えば、第Ⅱ部第2章では、石川啄木の「漂泊」の冒頭場面の海の描写はゴーストの「マルワ」を意識して書かれたことを示した)とプロット上の影響(例えば、第Ⅱ部第3章では、小栗風葉の「世間師」の後半のプロットは「ふさぎの虫」を下敷きにして構想されたことを示した)に注目した。このように影響関係を明らかにした上で、論考を対象作品全体に敷衍して、読書体験を通して摂取された要素は作品の中でどのように活用されているのか、また、他の要素とどのように融合しているのかについて考察を行なった。こうした作品分析によっては影響関係を解明したのみではなく、作品の新しい解釈への可能性を示した。

以上のように比較文学の方法論を意識しながら、ゴーストはプロレタリア文学以前の日本文学にどのような影響を与え、また各作家がその刺激をどのように己のものにしていったかを実証し、俯瞰したのが本論である。